

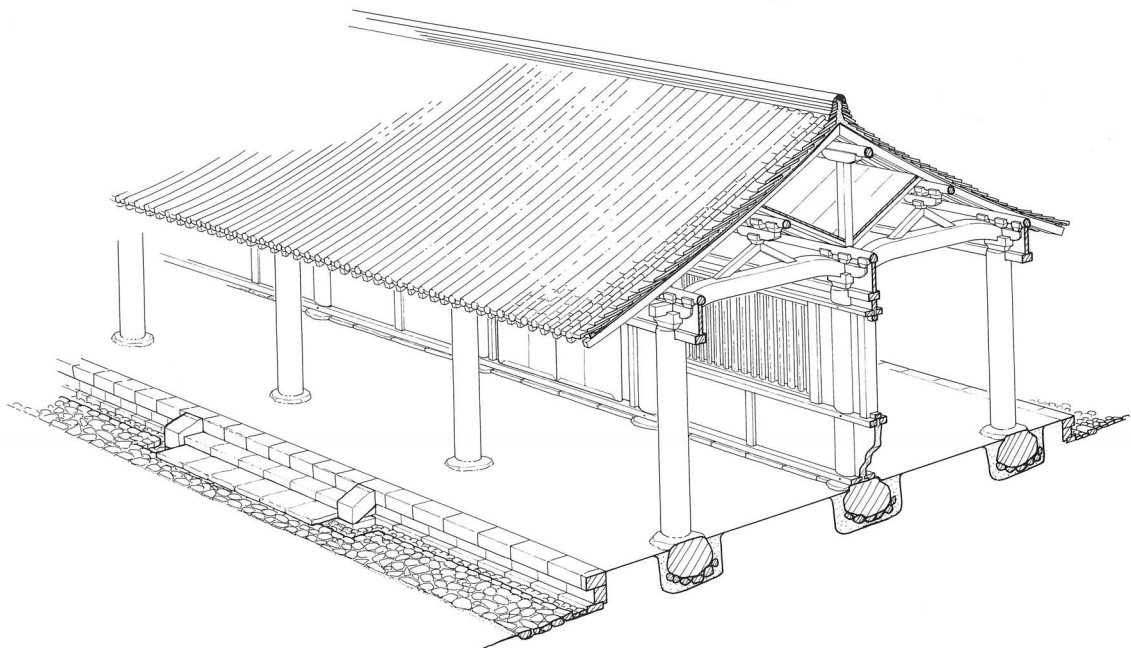
6 結 語

回廊 1998年度、1999年度の調査とあわせて南面回廊の東半と東面回廊を全面発掘した。回廊の規模は『流記』の記載とおおきく矛盾することはなく、火災後の回廊の復興事業が、創建の規模を踏襲して行われてきたことをあらためて確認した。また東面回廊の門を境に南北で桁行柱間寸法が異なるという『流記』にはない事実を明らかにし、礎石位置の変更がないことからみて、それが回廊の創建当初からの設計であることを確認した。

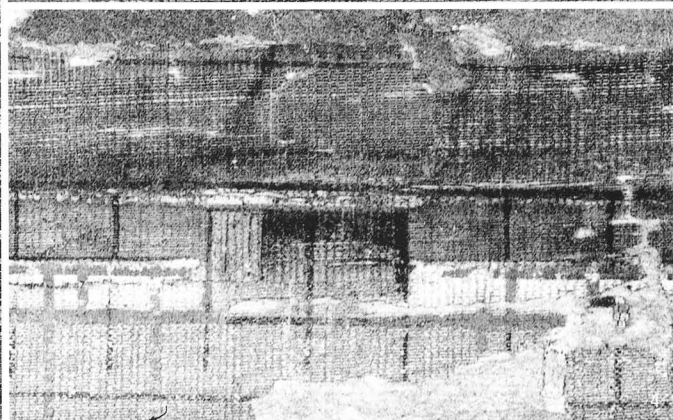
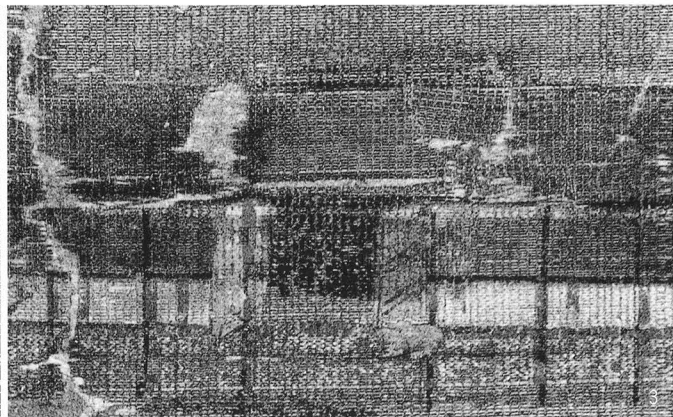
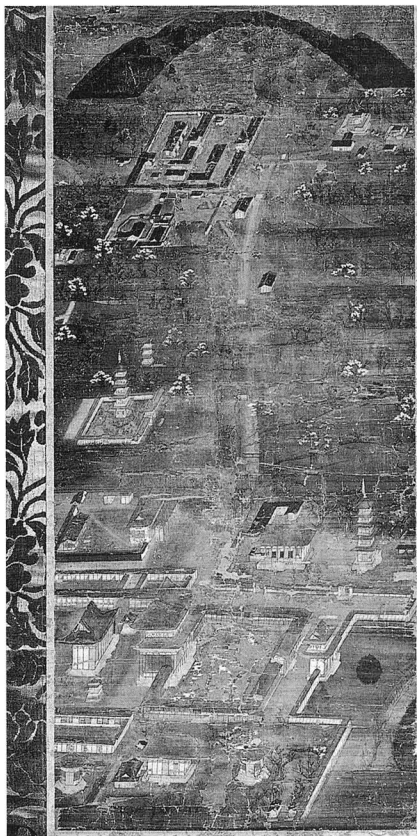
基壇縁と外周 今回検出した凝灰岩切石の基壇外装・河原石組の雨落溝と石敷は、中門北の基壇外周B期（『概報Ⅰ』）と、東面回廊北半西側にある外周施設（『概報Ⅱ』）と、位置・規模・構造ともに一致することから、一連の仕事であろう。このうち中門北側や東面回廊北半西側の石敷の下には、廃棄土坑や足場穴が検出され、今回も石敷敷設前に瓦敷地業を行っていることから、この外周施設は、創建当時のものではないことは明らかで、敷設の時期については今後の検討課題となろう。また、おなじく河原石をもちいる中金堂前庭部のⅡ期石敷（『概報Ⅲ』）との関係も追究する必要がある。

階段と門 東面回廊の基壇西辺で階段を確認した。2段に復元できる階段は、基壇外装の地覆石を抜き取った後に築成している。基壇縁や外周の施設と一連の仕事であるのか、あるいは階段のみ後世に付設したのか、明確な証拠を得ることはできなかった。階段は東面回廊の柱間1間分に対応し、この柱間はほかの柱間よりも寸法を大きく設定していることから、回廊に開く「楽門」の位置を知ることができた。さらに「楽門」の位置が回廊を設計する際の基準となり、中金堂や中門の石敷、東西金堂とも密接な関係があることが明らかになった。

内庭部 火災後の瓦を廃棄した土坑が検出された。創建期から平安時代までの瓦を含む廃棄土坑が多く、中世以降の瓦を含むものもある。いずれも内庭部の東南隅に集中しており、中金堂前庭部、中門北、「楽門」の門前など、内庭部の主要な位置を避けて廃棄しているとみられる。調査区西辺で検出した瓦敷地業は、内庭の一部を改修したことを示している。



第21図 回廊建物復元図



第22図 『春日社寺曼荼羅』 室町時代初期（大阪市立美術館蔵） 本文4・21ページ参照

1 中心伽藍部分 2 絵図全幅 3 東面回廊の楽門 4 西面回廊の楽門